

JUGEND

MOZART & MAHLER

PHIL

14

ごあいさつ

本日は、ユーゲント・フィルハーモニカー第14回定期演奏会に足をお運びいただき、誠にありがとうございます。

ユーゲントにとって活動14年目となる本年、当団は日本青年館で開催された第3回東京国際音楽祭に出演しました。世界各国から集まったオーケストラ・合唱など様々な団体と交流を深め、世界共通言語としての音楽の力を再確認することができました。当団は「オーケストラの社会貢献のあり方を模索する」という理念を持っていますが、その根底には音楽の持つ普遍的な力、そしてそれを愛する『アマチュア』ならではの力が不可欠です。今後もその力を信じて、ユーゲントらしい活動を展開していく所存です。

さて本日は、初共演となります海老原先生の指揮で、モーツァルトとマーラーが遺した2つの珠玉の交響曲をお届けいたします。今回出演を予定しておりました田中一嘉先生との共演が叶わないのは大変残念ではありますが、海老原先生の素晴らしい音楽性のご指導のもと、団員一同演奏会の成功に向け鋭意準備を重ねてきました。どうかお楽しみいただければ幸いです。

最後になりますが、急なご依頼にもかかわらずご指導をいただきました海老原先生をはじめ、演奏会にお力添えいただいた皆様、そしてご来場いただいた皆様に厚く御礼を申し上げます。今後とも当団の活動に対してご愛顧を賜りますよう、どうぞよろしく申し上げます。

ユーゲント・フィルハーモニカー 代表 湯田 怜央奈

プログラム

W.A. モーツァルト：交響曲第41番ハ長調 K.551 《ジュピター》

— 休 憩 —

G. マーラー：交響曲第6番イ短調 《悲劇的》

指揮 = 海老原光

開演中は携帯電話の電源をお切りください。

他のお客様のご迷惑となりますので、演奏中のお席の移動はご遠慮ください。

未就学児をお連れのお客様は、モニタールームにてご観覧ください。

〈指揮〉海老原 光

鹿児島生まれ。鹿児島ラ・サール中学校・高等学校、東京芸術大学を卒業、同大学院修了。その後、ハンガリー国立歌劇場にて研鑽を積む。指揮を小林研一郎、高階正光、コヴァーチ・ヤーノシュの各氏に師事。2007年ロブロ・フォン・マタチッチ国際指揮者コンクールで第3位、2009年ニコライ・マルコ国際指揮者コンクールで第6位入賞。2010年アントニオ・ペドロッチ国際指揮者コンクールでは審査員特別賞を受賞。2019年、九州シティフィルハーモニー室内合奏団首席指揮者に就任。これまでに、日本フィルハーモニー交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、東京都交響楽団、東京交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、読売日本交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、群馬交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、大阪交響楽団、関西フィルハーモニー管弦楽団、広島交響楽団、九州交響楽団、ほかを指揮し、客演を重ねる。2011年より毎年霧島国際音楽祭に登場している。また、2012年に続き、2015年に再びクロアチア放送交響楽団の定期公演（ザグレブ）、また2019年にはゲデレー交響楽団（ハンガリー）に客演し、好評を博した。



今回出演を予定していました指揮者の田中一嘉先生は、急病のため当公演への出演を断念せざるを得ない状況となりました。田中先生の一刻も早いご回復を祈念しております。

ユージェント・フィルハーモニカー

Jugend Philharmoniker (ユージェント・フィルハーモニカー) は、一般財団法人日本青年館の音楽行事（全国高等学校選抜オーケストラフェスタ、全日本高等学校選抜オーケストラ・ヨーロッパ公演、日本ユングオーケストラ・ヨーロッパ公演）に参加したメンバーが中心となって2006年3月に創設されたオーケストラである。全国各地の様々な高校や大学オーケストラ出身のプレイヤー約80名が集まり、東京を拠点として活動している。3月の定期演奏会を中心に、福祉施設や普段生のオーケストラに触れる機会のない農村への訪問演奏、地方公演、行楽施設の各種イベントやテレビ番組での依頼演奏など幅広い活動を行っている。音楽的に、そして人間的に成熟した団体作りに励みながら、「アマチュア・オケだからできること（≒プロオケには出来ないこと）」を追求している。

* ユージェント・フィルハーモニカーでは学校・老人ホームなどの福祉施設や、その他各種イベントなどでの依頼演奏を受け付けています。詳しくは当団Webサイトをご覧ください。

曲紹介

モーツァルトとマーラーが交差する場所

「マーラーのおかげで、それまでモーツァルトのオペラに対して向けられてきた観客たちの実のない漠たる敬意は、一挙に熱狂へと変わり、どよめきが歌劇場を揺るがした。」

指揮者でマーラーの友人でもあったブルーノ・ワルターは、マーラーのモーツァルト受容への功績をこう記している。マーラーが音楽監督としてウィーン宮廷歌劇場（現在の国立歌劇場）に勤めていた10年間のなかで、最も力を注いだ作曲家がモーツァルトだった。この歌劇場は、およそ100年の時を隔てて生きたモーツァルトとマーラーが交差する場所のひとつである。

マーラーが取り組んだのはオペラだけではない。1899年11月5日に楽友協会で行われたウィーン・フィルの定期演奏会で、マーラーがモーツァルトの《ジュピター》を指揮した記録も残っている。ウィーン・フィルの定期演奏会では10年以上も演奏されていなかったこの交響曲を、マーラーは甦らせた。ウィーン新聞（Wiener Zeitung）に載った批評は、技巧的でありながら優美な作品の魅力を開かせ、聴衆に大きな共感を与えるマーラーの型破りな指揮ぶりと芸術観を讃えている。

W. A. モーツァルト ^(1756～91)：交響曲第41番ハ長調 K.551 《ジュピター》

第1楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ

第2楽章 アンダンテ・カンタービレ

第3楽章 メヌエット：アレグレット

第4楽章 モルト・アレグロ

このハ長調交響曲が1788年8月にウィーンで作曲されたことは分かっているが、どんな目的で書かれ、いつどこで初演されたかまでは明らかになっていない。古代ローマの神ユピテルに由来する通称《ジュピター》は、その壮大な音楽にちなんで後につけられた。

華やかなソナタ形式の第1楽章は、冒頭の音階の連打による音型が全体を貫く。3拍子の第2楽章は息遣いの長い静かな楽章だが、ドラマチックでもあり、ハ短調で和声がにじり寄るように変化していく第2主題などは、前年に作曲されたオペラ《ドン・ジョヴァンニ》の騎士長の石像の場面を思わせる。第3楽章は華麗なメヌエット。対位法の技巧が凝らされた第4楽章は、「C(ド)－D(レ)－F(ファ)－E(ミ)」

という音型をはじめとするいくつかの動機が絡み合い、孤高のクライマックスへと至る。

宮廷歌劇場での仕事を始めてしばらくした1903年、マーラーは舞台美術家アルフレート・ローラーを起用して舞台の近代化を進め、それによって前述した新しいモーツァルト像を築いていった。第6交響曲を書いたのは、ちょうどその頃のことである。

彼は1903年から1905年にかけて、おもに歌劇場の夏期休暇中、オーストリア南部の湖畔の町マイアーニックの作曲小屋で筆を進めた。完成した作品は1906年5月27日にドイツのエッセンでマーラーの指揮によって初演され、長い大喝采を浴びた。

これまでユーゲントが演奏してきた第5番や第9番と比べると、第6番を特徴づけるのは何とんでも巨大な楽器編成、そして打楽器である。使われる打楽器は、二人で奏されるティンパニのほかに、グロッケンシュピール、ヘルデングロッケン（カウベル）、低音の鐘、シロフォン、大太鼓、トライアングル、小太鼓、シンバル、タムタム、ルーテ（鞭）、そしてハンマー（通常木づちのようなものが使われる。余談だが、筆者が団員だった約10年前のユーゲントは打楽器を極力必要としない選曲をしていた記憶があるので、感慨深い）。

なお、マーラーは第2楽章と第3楽章のどちらを先に演奏すべきかを試行錯誤していた記録が残っており、今日でも指揮者によって演奏の順序は様々である。今回はスケルツォ、アンダンテの順に演奏する。



ウィーン国立歌劇場にあるロダンによるマーラーの胸像。1909年にパリを訪れたマーラーと会ったロダンは「マーラーの頭はフランクリン、フリードリヒ大王、それにモーツァルトを混ぜ合わせたようなものだ」と語った。

G. マーラー（1860～1911）：交響曲第6番イ短調《悲劇的》

第1楽章 アレグロ・エネルジコ・マ・ノン・トロップ

第2楽章 スケルツォ：重々しく

第3楽章 アンダンテ・モデラート

第4楽章 フィナーレ：アレグロ・モデラート

第1楽章は力強くも不気味な行進曲。ティンパニの「ダンッ、ダンッ、ダ／ダン、ダン、ダン」というリズムと、それとともにトランペットが奏する長三和音（長調）から短三和音（短調）へと移る音型は、いずれも全楽章に共通する示導リズムと示導和音であり、この作品の悲劇的性格の烙印を押す。第2楽章は、「古風に」と指定された優雅なトリオ（中間部）をもつ、悪魔的なスケルツォ。叙情的な旋律とハープのつまびくアルペジオが美しい第3楽章へと続く。牧歌的で暖かみがあるものの、遠くから聞こえるヘルデングロッケンの音色はどこか寂しい。

第4楽章では、序奏に導かれて示導リズムと示導和音が力強く奏され、行進曲風の楽節へと続く。ときおり希望をのぞかせながらも不穏な空気を帯びたまま展開し、音楽の緊張が頂点に達したかと思うと、ハンマーが打ちつけられて崩れ落ちる。ハンマーの暗示する意味については諸説あるが、アレクサンダー・リッターがリヒャルト・シュトラウスの交響詩『死と浄化』に寄せた詩のこの一節から、マーラーが着想を得たのではないとも言われている。

(死を待つ貧しい病人のもとに) 死の金づちの最後の一撃が鳴り響き、肉体を引き裂き、死の闇が覆った／しかし、彼が天界に求めた世界の救い、すなわち世界の浄化が、力強く響きわたる

1911年に死の床にあったとき、マーラーは意識が混沌としたまま「モーツァルト (Mozarterl) !」と二度叫んだという。そのときの彼にもハンマーの音は響いていたのだろうか。

中村 伸子 (元団員・音楽学)

今期の活動紹介

- | | |
|---------|---|
| 2019 | |
| 6.29 | 依頼演奏：芦花翠風邸 |
| 7.12 | 第3回東京国際音楽祭“奏”一合唱と器楽の祭典2019 (日本青年館ホール)
チャイコフスキー：荘厳序曲《1812年》
ふるさと (Bravura Youth Orchestra、捜真女学校弦楽部、合唱との合同演奏)
指揮：安齋拓志 |
| 7.20 | 依頼演奏：デイホーム弦巻 |
| 8.11 | 第3回福島公演 (ふくしん夢の音楽堂 (福島市音楽堂) 大ホール)
ベートーヴェン：交響曲第7番
ドヴォルザーク：交響曲第8番
チャイコフスキー：荘厳序曲《1812年》(福島県内高校オーケストラ部・弦楽合奏部有志との合同演奏)
指揮：安齋拓志 |
| 9.14 | 依頼演奏：デイホーム弦巻 |
| 11.30 | 室内楽演奏会 (団内) (東京女子医科大学 弥生記念講堂) |
| 12.28 | 依頼演奏：ヒルデモアたまプラーザビレッジIII |
| 12.31 | 依頼演奏：山中湖畔荘ホテル清溪 |
| 2020 | |
| 1.11-12 | 合宿 (山中湖畔荘ホテル清溪) |
| 3.14 | 第14回定期演奏会 (すみだトリフォニーホール 大ホール) |